
ライトノベルが軽いなんて誰が言った!?

Tio_Valentine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトノベルが軽いなんて誰が言った！？

【Nコード】

N8089Y

【作者名】

Tio Valentine

【あらすじ】

NEETでどうしようもないアダルトチルドレンが立ち直る物語

1話 ゆづすけ 25歳 俺はニートじゃない!!!ライトノベル作家になる

できるだけ更新するようにいたします。

1話 ゆうすけ 25歳 俺は二トじゃない！！ライトノベル作家になる

ライトノベルは日本のサブカルチャーの中で生まれた小説のカテゴリの一つ。英単語のLightとNovelを組み合わせた和製英語であるが、現在では英語圏などでも日本の小説ジャンルを指す単語として使用されている。略語としてはラノベ、ライノベ。稀にはあるが、軽文学や軽小説と表記される場合もある

プロローグ

「バゴン」と後からとてつもない音がした。小説家を目指している俺にしては本当につたない表現だが、まさか現実にはドアが蹴り飛ばされ、こっちに飛んでくるなんて思わなかったから、こんな表現で勘弁してほしい。

振り向くと長い黒髪の女が言う

「あんたが木崎勇輔？私に依頼した」

1・ゆうすけ 25歳 俺は二トじゃない！！ライトノベル作家になる

俺が応募している五十鈴社のライトノベルの応募総数が、5000を超えたらしい。

くそつ、俺はもう何年も前から、やっているのに。この不景気で希望の無い世の中で仕事や夢がなくなり、巷の当たっているライトノベルを読んで「これなら俺もできそう」と勘違いしたDQN共のせいだ。

一言言おう。俺はお前らなんかとは違う。俺はもう高校のときから構想を練り続け、大学時代からライトノベルを書き始めたのだ。一度は、ライトノベル新人賞の最終候補まで残ったことがあるんだ。だが、審査員が選んだのは、訳の分からない高校生がひたすらモテまくって、ハーレムな高校生活を送るといういかにも萌え好きなDQNに受けそうな『LOVELYチャイ』とかいう訳の分からない作品だ。しまった。訳の分からないを2度使ってしまった。俺としたことが…。

最終候補に選ばれてから早5年がたつてしまい、最近では2次選考の段階で落とされてしまうザマだ。

俺は、もう25歳になる。一応、親の目もあつたりするから、仕事を続けながらライトノベルを書こうと思い新卒の22歳の時にZETエンターテイメントという会社に就職した。しかし、入った会社がいわゆるブラック企業っていう奴だ。研修もほぼ無く、ひたすら新しい会社に『イーネットワークソリューションZET-5』とかいう商品をひたすらセールスする仕事をやらされた。冗談じゃない！！俺はZETがアニメ配信会社だから入ったのだ。なのになんで、ネットワークのソリューションの新規営業とかいう訳の分からない事をやらされなきゃならないのだ。

しかも永遠に毎日100件も訪問しても「いらない」「もう二度とくるな」「くたばれ」など散々断られ続ける仕事だ。ほとんど、休みもなくサビ残ばかりで、俺の大切なライトノベルを書くための時間は全くなくなってしまい、

俺は、こんなつまらない仕事のためにがんばっているのではない、夢を叶えるために生きているんだと言う事に

気がつき、部長に辞表を叩きつけてやって辞めてやった。さすがにそのときはスカツときたもんだ。

そこから俺は、親には一応公務員になるといつて猶予をもらい、ひたすらライトノベルを書き続け応募する日々を送った。

だが、一応親の手前公務員になるといつてあるし、俺としても公務員みたいな暇な仕事であれば俺の好きなライトノベルを書き続けることができる。いわゆる一石二鳥のアイデアだと思い、公務員試験を受け続けている。だから一言言おう。

俺はNEETじゃない!!!

!!!!!!!

必死で努力しているんだ!!!
いつか結果が出るはずだ!!!

しかし、両方とも結果が出ず、2年がたってしまった…。そんな秋のことだ。

夢を見ちゃ駄目か？

久々っていうわけではないが、2週間ぶりに外に出る。同じ漫研サークルで同じZET社に入った友人のケンジ奴が

遅い夏休みで実に2年ぶりにこっちに戻ってくるということなので久々に飲もうということになって待ち合わせをしているのだ。俺はあんなブラック企業を辞めてしまったが、奴は続けているらしい。

「おう、ゆうすけ久しぶり」

振り返るとケンジがいた。どことなく痩せた感じがするが、スーツ姿がなんとなくなだが、以前より様になっている感じた。昔はいかにもスーツに着せられているっていう感じだが今は着こなしているし、声も昔みたいなオタ特有のしゃべり方ではなく、大きくはつきりした声だ。どうやら、ケンジは仕事の終わりにもかかわらず居酒屋の予約を既に済ましてくれていたみたいで、俺はその店に向かった。

「なんだよ、ゆうすけ まだ就職していないのかよ？ぶっちゃけ、1年以上ニートしているとマジやばいって。面接でつつこまれるぜ」

「いやあ、この間なんか商品の納期でトラぶってマジ大変だったよ。だけど、おかげで支店の売り上げ1位になってさあ。相変わらず残業は多いし、休日出勤は多いけどよ、まあ支店長になれば給料上がるから我慢だわな」

「総務部の麻紀ちゃん覚えている？そうそうあのFカップの。あの子と遂にデートできてさ。いやあ、もしかしたらモノにできるかも

しれなくてさ。いや、がんばちゃおうかな」

「で、ゆうすけの方は最近どうなんだよ」

どうだなんて言われても、正直言えば何もない。さつきからケンジに一方的にここ2年にあった事をマシングンのように喋られるといかに2年間という月日が長かったを感じさせられる。社会人デビューを果たし、いつの間にか仕事で成果をあげて彼女ができそうになっている。ただ、それだけの事だ。しかし、自分にはこの2年間は何も無い。

それが事実だ。

「ゆうすけ、お前まさかまだ、小説家っていうかライトノベル作家目指しているのかよ？」

図星だったため、無意識に目を逸らしてしまう。それを察したのかケンジは言う

「いや、俺もさあ、同じサークルにいたから良く分かるし、俺もさあ日本の漫画会を変えてやるって2徹、3徹して漫画大賞に応募したけど、俺らもうそんな年じゃないじゃん。現実を見ようぜ。確かに、夢を諦めるのはつらいかもしれないけどよ、応募日までに間に合わせるために、漫画描いていたときの2徹や3徹していたからさ、今の会社の激務に耐えられるんだよ。そう考えると、あの努力も悪くないって思うぜ」

俺は走った。

ただひたすら走った。

ケンジはこの後実家に帰ると言って別れた

しかし、あの後ケンジが色々とアドバイスなのか愚痴なのか説教なのか、分からないが色々言っていたが頭に入らなかった。少しでも頭に入った情報を追いつくために走る。

「夢を諦める？そんなことができるか」

「現実を見る。こんな現実は何の価値がある。現実から逃げて何が悪い。違う、俺は逃げてない。必死にがんばっている。何を？ここ半年、小説も公務員の勉強もしてないじゃないか？違う。今は考えているだけ。何を」

本当は小説の主人公のように叫びたかったが、チキンな俺にそんな事はできなかった。

ただ、部屋の中に猛ダッシュに駆け込み誰も入ってこないように鍵を閉める。とはいっても口うるさい両親はいない。今月から、父親が短期赴任のため母親と一緒に北海道に行っている。俺としては、常に小言を言う母親もいないし、ときおり妙に長く古い教訓のような説教を言う父親がいないのは唯一の救いだ。

そのとき廊下から足音がし、部屋をノックする音が聞こえて心臓がドキッとした。

両親はしばらく帰ってこないはずだ。じゃあ、誰だ。俺には従兄弟も兄弟もいないし、

アホな3文ライトノベルと違ってイタイ幼馴染なんかもない。じやあなんだ？

「あんた、木崎勇輔よね。いるんでしょう。ってか、いるのは分かっているから、鍵開けてくれない。」

愛想は無いが、綺麗な女の声だ。もしや、あれか。依然アダルトサイトで魔がさして押してしまった4クリック詐欺の請求か？金の回収のために暴力団が押しかけてきたに決まっている。女の声だと思つてドアを開けたら暴力団男たちがズラズラと入ってくる。そうに決まつて…

「ああ、メンドクサイ。もうドア開けるからね」

その言葉が聞こえた瞬間にドアがSF映画よろしくに飛んできた。幸い天井にドアが当たっただけだが、それでもあまりの驚愕に体が動かない。

「なんだ、やっぱいるんじゃない。いるなら出てきてくれれば、鍵壊さなくてすんだのに。面倒ね」

長い黒髪の女が靴を履いたままこっちに入ってきた。顔は廊下と俺の部屋の電気を消してあるため良くは見えないが、スラリとして背の高い女だつて言うことは良く分かる。

「あんた… だ れ」

ようやく俺は口に出す。

「私は五十嵐五十鈴。NON・DEMO屋だよ。あんたが、2週間前にWEBで依頼した件で来たのよ。まさか、あんた覚えてないの

？
「

女は呆れたような口調で言った。
淡々と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089y/>

ライトノベルが軽いなんて誰が言った!?

2011年11月24日21時53分発行